

「インクルーシブ教育」に関する意識調査 結果と考察

基本的な情報に関する項目

質問1 あなたのイメージするインクルーシブ教育について教えてください。

教頭

○ポジティブなイメージ

- ・多様性の尊重: 国籍、性別、障害の有無等に関わらず、すべての子どもが共に学び、支え合い、多様性を認める教育。
- ・全ての児童生徒が対象: 全ての人に優しい教育。通常級での優れた学級指導。特性のある生徒に特別な教育というのではなく、すべての子どもたちに配慮した教育
- ・個別最適化された教育: それぞれの児童生徒の個性やニーズに合わせた、きめ細かい指導と学習環境の提供。合理的配慮の提供。

○ネガティブなイメージ

- ・現在の日本の教育制度では同年齢の児童生徒を一律に、効率的に知識を身に付けさせる教育が元になっているので実現には課題が多い

○その他

- ・必要なもののイメージ
- ・Win-Win
- ・勉強中
- ・「心と体の相談室」の取組の一貫として「サポートルーム」を設置している

全体として、インクルーシブ教育の重要性に対する認識は高い。多様な子どもたちが共に学ぶことの大切さを理解している。個別最適な教育の必要性を感じている。インクルーシブ教育の実現には、学校全体、ひいては社会全体の協力が不可欠であると考えている。
インクルーシブ教育は、単に障害のある子どもたちを支援するだけでなく、すべての児童生徒がより良く成長できるための教育であるという共通認識があることが分かった。
管理職として、教諭よりもインクルーシブ教育への関心、重要性の感じ方等が高いのではない。

小学校教諭

○ポジティブなイメージ

- ・多様性の尊重: 障害・病気の有無、国籍、宗教、文化、ジェンダーフリーなど、様々な背景を持つ子どもたちが共存し、お互いを尊重し合うことの大切さ。
- ・個別最適な支援: それぞれの児童の特性やニーズに合わせたきめ細やかな支援の必要性。強みを生かす。
- ・共に学ぶ環境: 障害のある子どもも、ない子どもも、同じ教室で共に学び、成長できるような環境。誰一人として取り残さない。
- ・学校、教師の役割: 多様な子どもたちに対応するためには、教師の専門性や協力体制が不可欠であること。みんなで見える。

○ネガティブなイメージ(5名)

- ・理想ではあるが、実現は難しい・あいまいなまま

○誤ったイメージ(3名)

- ・価値観の混乱・おもしろおかしく・公平であり不平等

○イメージがない、わからない(4名)

インクルーシブ教育に対する理解の広まりや関心の高まりが窺えるが、理想と現実のギャップから難しさを感じたり、正しく理解できていなかったりする様子も窺える。

中学校・義務教育校教諭

○ポジティブなイメージ

- ・平等な教育機会: 誰もが平等に教育を受けられること、障害の有無に関わらず同じスタートラインに立つこと
- ・多様性の尊重: 様々な個性や背景を持つ子どもたちが、それぞれに合った学び方を保障すること
- ・個の尊重: 一人ひとりの子どもを尊重し可能性を引き出す教育、個別最適化、多様な学習方法の導入、合理的配慮など、学習内容や方法の多様化
- ・共生社会の実現: 障害のある人もない人も共に学び、共に生きる社会の実現を目指すこと
- ・学校、教師の役割: すべての児童生徒に対応できるよう、教師の専門性向上、インクルーシブ教育を推進するための校内体制の強化、通常学級と特別支援学級の連携、バリアフリーな環境整備など、物理的な環境の整備

○ネガティブなイメージ(4名)

- ・理想ではあるが、現実には難しい・どうすればいいかわからない・通常学級と特別支援学級の連携が難しい

○課題意識(1名)

- ・児童生徒、保護者の理解が重要

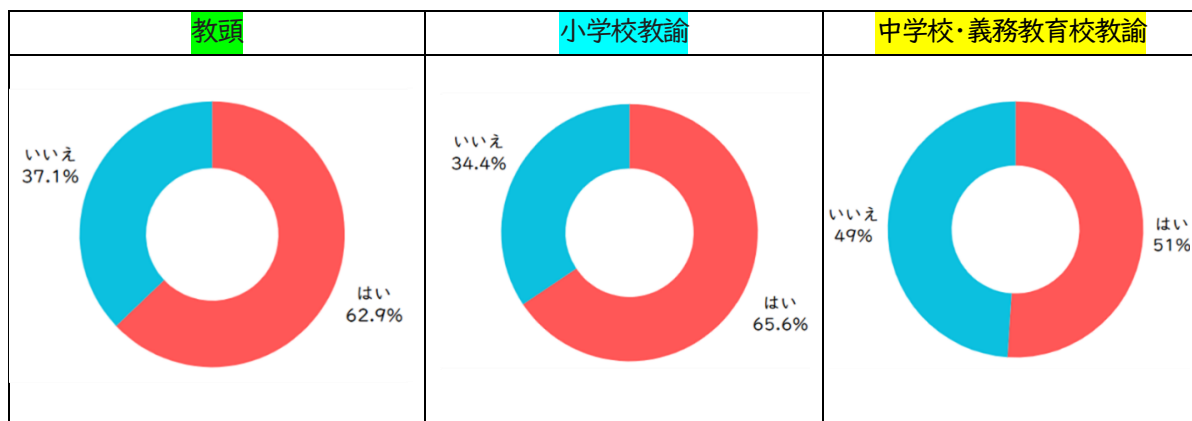
○誤ったイメージ(3名)

- ・福祉教育に似ている・どんな人に対しても同じような教育・同じ目標に向け支援を行う教育

○わからない、知らない(5名)

インクルーシブ教育に対する理解の広まりや関心の高まりが伺えるが、理想と現実のギャップから難しさを感じたり、正しく理解できていなかったりする様子も伺える。

質問2 在籍している学校でインクルーシブ教育の取組をされていますか？



質問3 質問2の回答の理由として、どのような取組をされているか教えてください。

教頭

- 交流及び共同学習
 - ・交流学級の授業
 - ・交流学級の当番活動
 - ・交流学級においての名簿順の配慮
- 学校行事、委員会活動、部活動等
- ユニバーサルデザインの視点を生かした授業の取組
 - ・視覚的な支援
 - ・分かりやすい指示、簡潔な指示
 - ・補助教材や提示物の利用
- 校内、学級間の連携
 - ・特別支援学級と通常学級との連携
 - ・特別支援学校と連携した地域交流
- 校内支援体制
 - ・不登校生徒への支援
 - ・介助員や学習サポーター
 - ・情報共有
 - ・個別の支援計画の作成
- 保護者や関係機関との連携
 - ・サポートルームにおいて、学校生活で困り感のある生徒をサポート
 - ・専門の先生が来校し、個別の相談やソーシャルスキルトレーニング等を実施
- 外国籍の児童生徒への対応
 - ・日本語の授業、日本の文化の理解
- 設備等
 - ・性差のない制服
 - ・多目的トイレの設置
 - ・玄関内のスロープの設置
- その他
 - ・事案があがったら、複数で早期対応している
 - ・組織として取組はない
 - ・インクルーシブに特化した取組はない
 - ・特別支援学級未設置のため、よく理解していない

多くの学校でインクルーシブ教育に向けた様々な取り組みが行われていることが分かった。特に、交流学級との連携や個別支援といった取り組みが盛んに行われており、児童生徒一人ひとりの成長を支援するための体制が構築されつつあると言えるだろう。一方、約35%がインクルーシブ教育の取組を実施していないと回答した。「事案があがったら」「組織として取組がない」「特別支援学級が未設置のため理解していない」等と、学校や教員によって認識の差があることが推測される。

小学校教諭

<はい>

○授業への参加形態

- ・協力学級での交流及び協働学習が多くの学校で実施されており、特に低学年ではその傾向が見られる。

○校内の支援体制

- ・支援員を配置し、個別指導やグループ指導を行っている。
- ・通級指導教室との連携が行われている。
- ・個別指導計画の作成に基づいて指導が行われている。

○環境整備

- ・バリアフリー化が進められ、物理的な障壁を取り除く努力が行われている。
- ・視覚的な支援として、イラストや図を用いたり、掲示物を工夫したりしている。
- ・多文化共生を推進するため、外国語の教材を使用したり、多様な文化を紹介したりしている。

○教員の取り組み

- ・児童一人ひとりのニーズに 대응べく、個別最適な指導を心掛けている。
- ・多様な児童に対応できるよう、特別支援教育に関わる研修や研究会に参加している。
- ・保護者との連携を密にし、家庭と学校が一体となって児童を支援している。

<いいえ>

○意識して取り組めていない。(1名)

○忙しい、特性を持った児童が多く、その対応に追われている。(2名)

○児童数に対して教員の手が足りていないので、きめ細やかな指導ができていない。(1名)

○交流学习はしているが限定的であり、基本的に通常学級と特別支援学級が分かれている(2名)

○わからない(2名)

インクルーシブ教育に関する取り組みが広がってきていることが伺えるが、教師の忙しさや人手不足からなかなか取り組めていない実情も窺える。

中学校・義務教育校教諭

<はい>

○交流及び協働学習

- ・特別支援学級の生徒が、通常学級(協力学級)で一部または全ての授業に参加している。

○環境調整

- ・バリアフリー化、ユニバーサルデザインの導入。
- ・席の配置、照明の調整など。

○個別支援

- ・それぞれの生徒の特性やニーズに合わせた個別指導・支援。
- ・1対1の指導や少人数グループでの指導。
- ・コミュニケーション支援(手話、絵カードなど)。

○合理的配慮

・車いす対応・拡大文字、拡大鏡の使用・読み上げ機能の使用・聴覚補助機器・補助具の活用など。

○教師の連携:

・特別支援学級と通常学級の教師が連携し、生徒を支援している。

<いいえ>

○特別取り組んでいることがない、思い浮かばない。(3名)

○「インクルーシブ教育」が話題に出たことがない。(1名)

○できる範囲(例えば行事、限られた授業等)でしか交流及び協働学習をしていない。(3名)

インクルーシブ教育に関する取り組みが広がってきていることが伺えるが、小学校の回答と比べると実践事例の種類が少ない。また、「いいえ」の理由の回答では、どんなことがインクルーシブ教育の推進に繋がるのか理解が不十分な状況や、インクルーシブ教育に対する意識が学校によってまちまちである状況も窺える。

質問4 **教頭**対象 インクルーシブ教育を進めていく上で課題と感ずることを教えてください。

○保護者、地域、教員等の意識の壁

○特性のある児童生徒への知識や理解不足

- ・固定概念から脱却できない
- ・子供自身が困っていたり、悩んでいたりを指導者が感じ取れるか

○教職員の配置、人材不足

- ・個々に関われる人材があればよい
- ・支援員や TT など、すぐ支援ができる環境
- ・専門的な知見のある支援員等の配置

○時間的な余裕

- ・それぞれの先生が実現したいことを行うだけの時間がない
- ・一人一人のもつ特性や特徴、背景を受け入れるためには、相互理解をする時間が必要

○教職員間や保護者との共通理解

○連携

- ・担任以外の教員や支援員等
- ・関係機関や専門家との連携をする時間や場の調整
- ・学校組織として連携して進めること
- ・校内委員会の設置
- ・当事者意識の高い学級担任・部活動顧問が支援の必要な生徒を単独で抱え込んでしまう

○社会のしくみ、学校としての課題等

- ・児童生徒の卒業後を考え、社会のしくみや社会基盤の構築を一層進める
- ・特別支援学級での個別指導を重視することが求められているのかインクルーシブ教育を推進すべきなのかという根本的な問題がある
- ・学校教育においては、インクルーシブ教育の理念を根底におきながら、特性をもった児童に合った環境を作っていくことも重要であると感じる。
- ・学校側も問題が起こらないことを第一としてしまう傾向がある

○課題が分からない

- ・何をしていくことがよいか分からない
- ・前例がない
- ・合理的配慮の提供方法が分からない
- ・課題が特にならない

○その他

- ・コーディネータの配置
- ・心理検査の活用、個別の指導計画の作成
- ・児童生徒の実態からどのように支援していくか

保護者、地域、教員の意識特性のある児童生徒への知識や理解不足や認識の差があることが推測される。

質問4 教諭対象 インクルーシブ教育について「分からないこと」「もっと知りたいこと」を教えてください。

小学校教諭

- インクルーシブ教育の基礎:インクルーシブ教育とは、目的、現状と課題、具体的な取り組み
- 教師の役割と実践:教師が一人でもできること、教師間の連携、家庭との連携、保護者への対応、具体的な授業の工夫
- 児童への支援・配慮:個別の支援、多様な学習スタイルへの対応、特別な配慮が必要な児童への対応、児童間の関係づくり
- 学校の取り組み:インクルーシブ教育を推進するための学校全体の取り組み、校内の支援体制づくり、学びやすい環境づくり、他の学校との連携

インクルーシブ教育について基本的なことから知りたいという回答もあったが、児童への支援や教師間・保護者との連携、校内支援体制づくり、学びやすい環境づくりなどについての実践的な情報を知りたいという回答が多く、すぐに役立つことを知りたいというニーズが強いことが窺える。

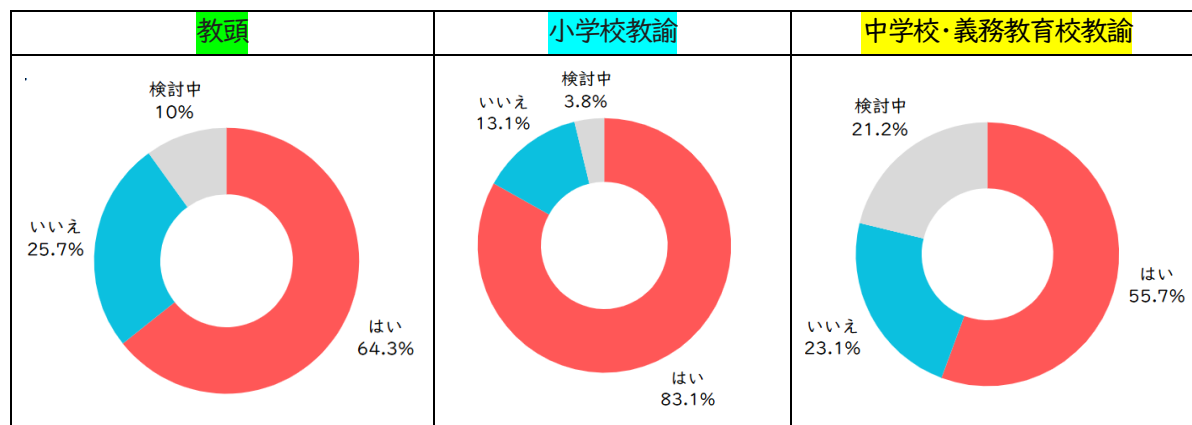
中学校・義務教育校教諭

- インクルーシブ教育の基礎:インクルーシブ教育の制度や法律、具体的な定義や意味、効果、現状と課題、群馬県におけるインクルーシブ教育の現状、具体的な取り組み
- 教師の役割:そのような役割を果たすべきなのか、個別支援の方法、情緒学級の生徒への支援方法、外国籍の生徒への支援方法、合理的配慮の具体例
- 評価について:インクルーシブ教育における評価方法、障害のある生徒の評価基準
- 学校の取り組み:環境整備（バリアフリー化など、物理的な環境整備の具体例）
- 連携について:特別支援学級との連携について（交流及び協働学習）、保護者との連携方法
- 心配なこと:教師の負担が増加しないか、障害のある生徒の受け入れが、他の生徒にどのような影響を与えるか

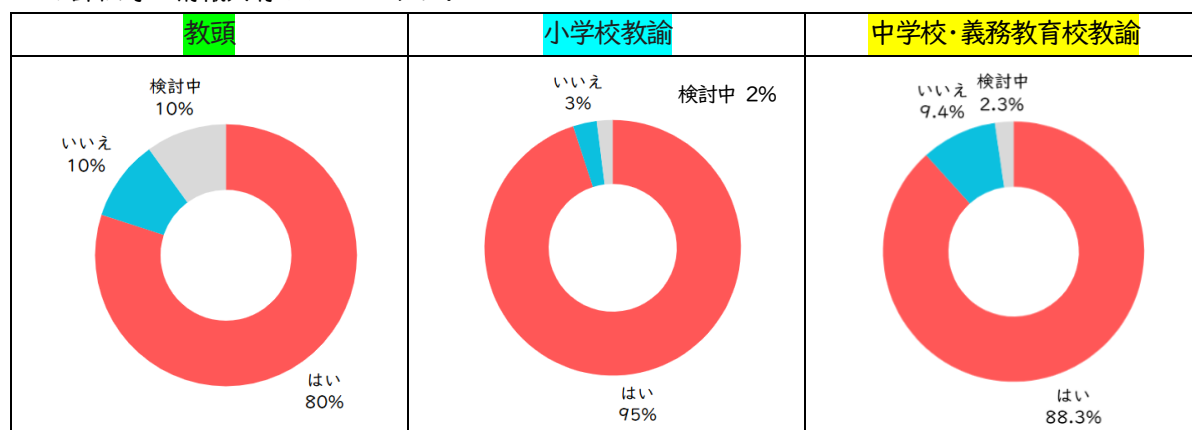
インクルーシブ教育について基本的なことから知りたいという回答もあったが、生徒への個別支援の方法、合理的配慮、教師間・保護者との連携などについての実践的な情報を知りたいという回答が多く、すぐに役立つことを知りたいというニーズが強いことが窺える。また、小学校では見られなかった評価の基準や方法について知りたいという回答があり、高校受験を抱える中学校における戸惑いが窺える。

学校体制に関する項目

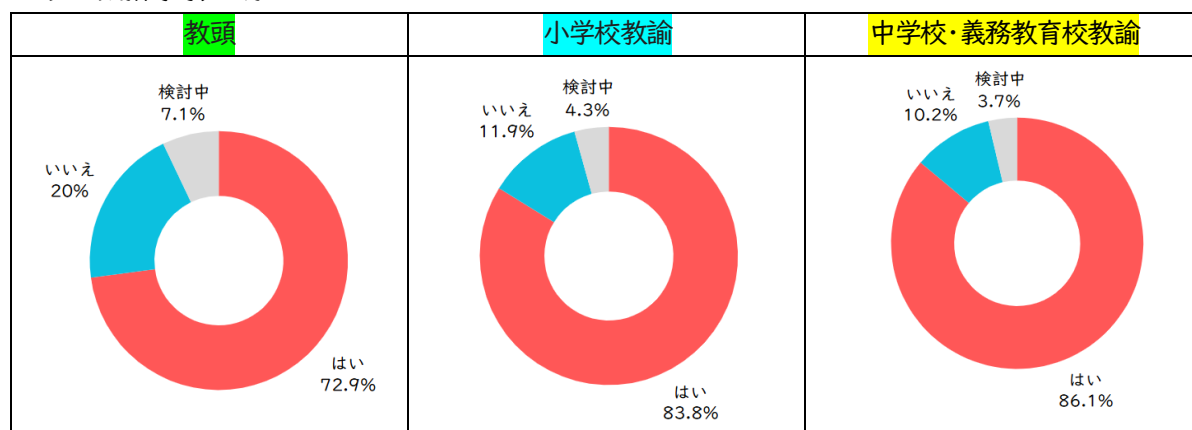
質問5 在籍している学校では、特別な支援を必要とする児童生徒の実態把握のために、心理検査、チェックリスト等を活用していますか？



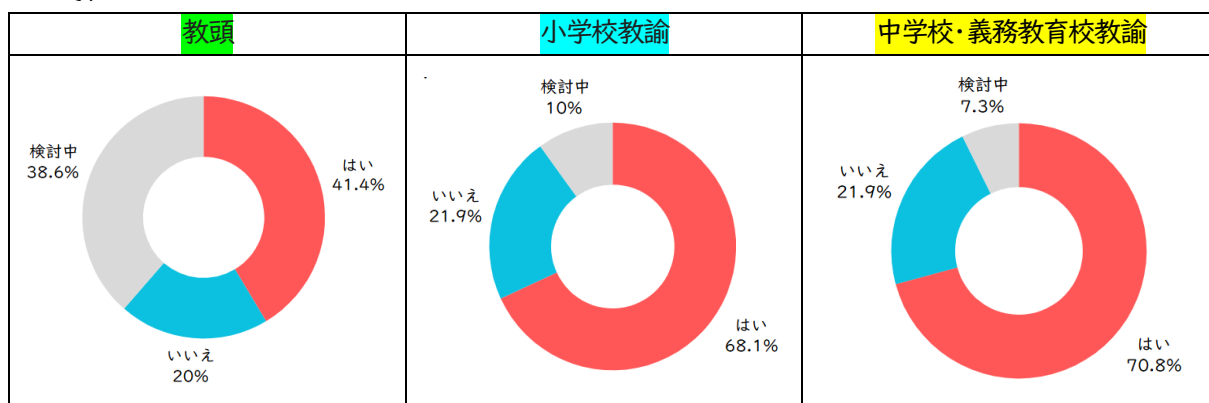
質問6 在籍している学校では、特別な支援を必要とする児童生徒について、個別の指導計画を活用して、学習計画や評価等の情報共有をしていますか？



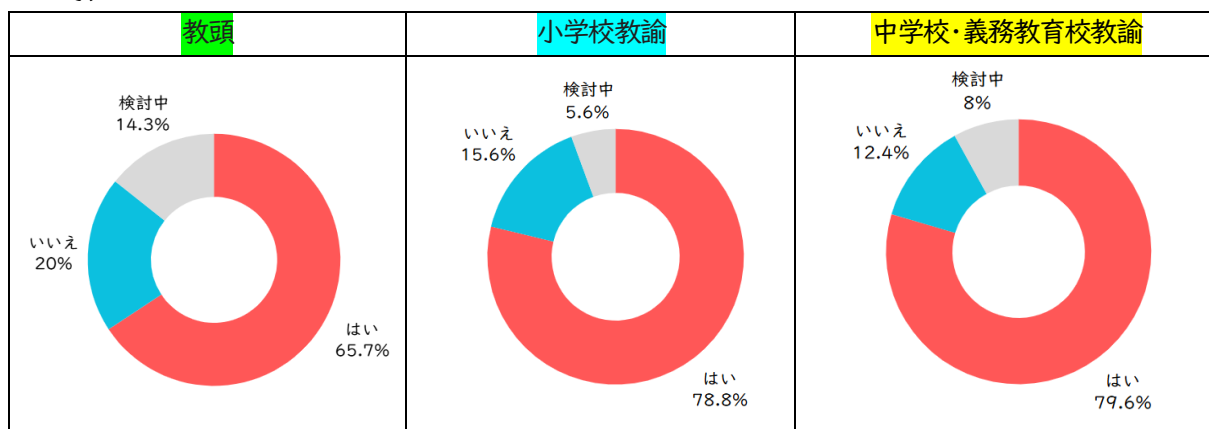
質問7 在籍している学校は、特別な支援を必要とする児童生徒に対して、指導形態の工夫（チームティーチング、少人数指導等）を行っていますか？



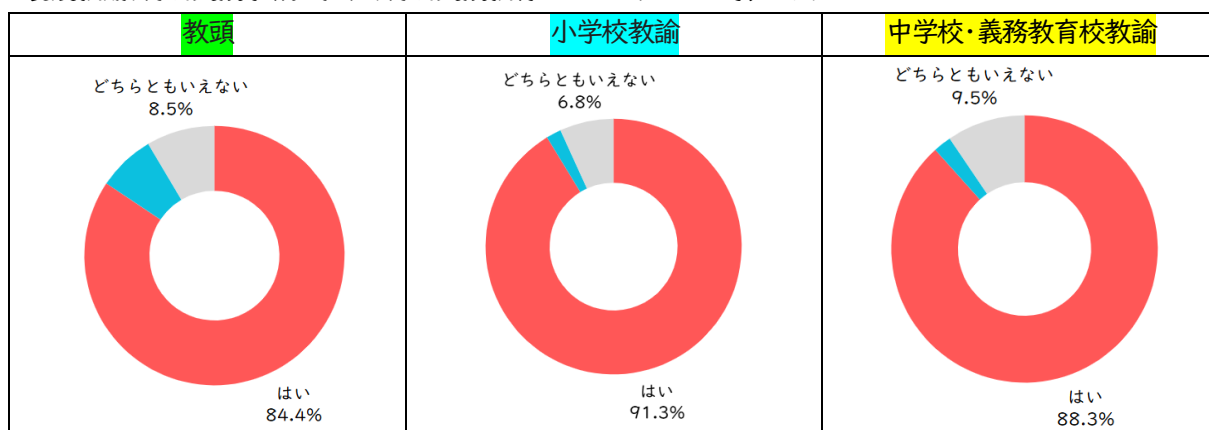
質問8 在籍している学校では、特別な支援を必要とする児童生徒の認知の特性、身体の動き等に応じて、特性に合わせた評価基準の設定（難聴のある児童生徒の音楽鑑賞の評価、言語障害のある児童生徒の音読の評価等）をしていますか？



質問9 在籍している学校は、特別な支援を必要とする児童生徒のテストにおいて、児童生徒の認知の特性、身体の動き等に応じた配慮（文字の拡大、時間の延長、児童生徒に合った学習用具の使用、集中しやすい環境設定等）をしていますか？

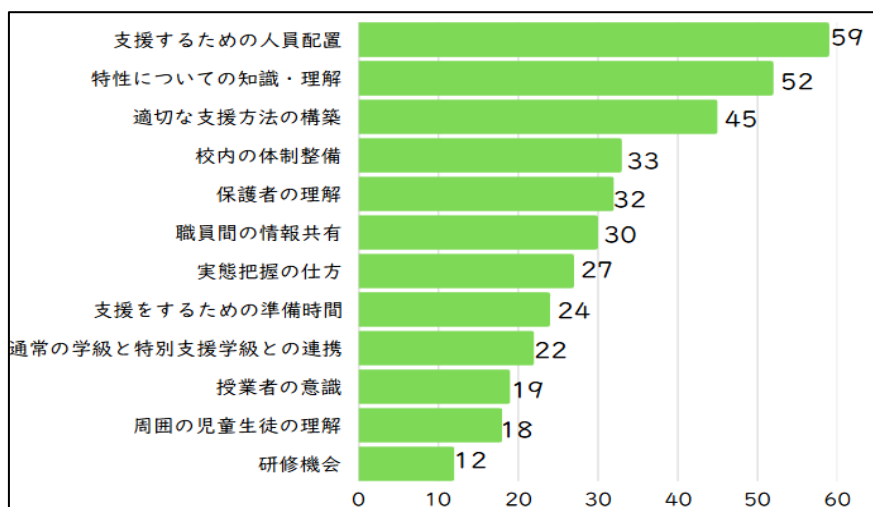


質問10 在籍している学校では、特別な支援を必要とする児童生徒に対する配慮事項について、日頃から教員間（学年の教員、養護教諭、特別支援学級の担任、特別支援教育コーディネーター等）で共通理解（学年の教員、養護教諭、特別支援学級の担任、特別支援教育コーディネーター等）が図れていますか？

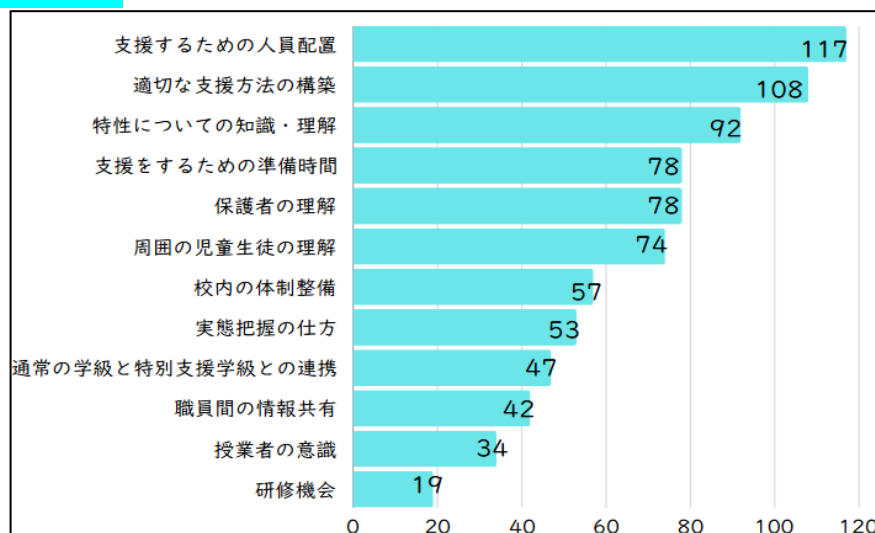


質問Ⅱ 在籍している学校において(自身が担当している授業について)、学習上の困難さがある児童生徒への配慮や支援をするために課題だと思うことはありますか？(複数回答可)

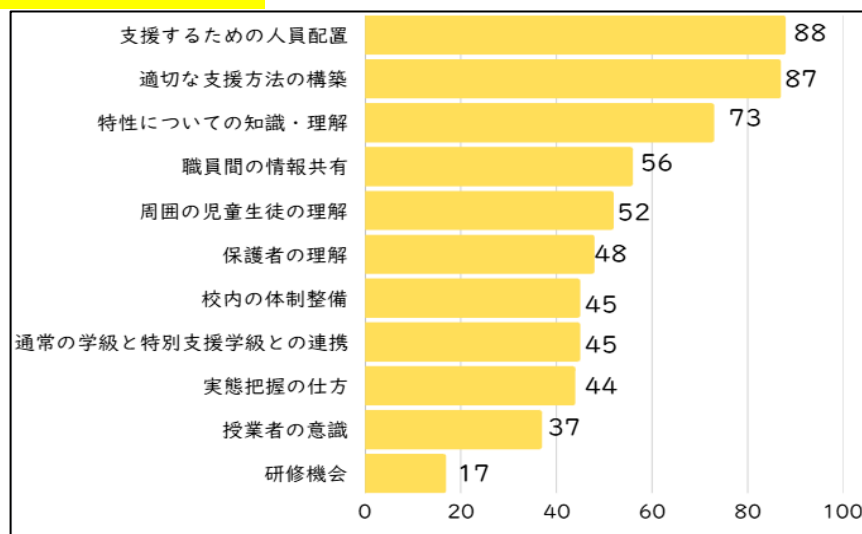
教頭



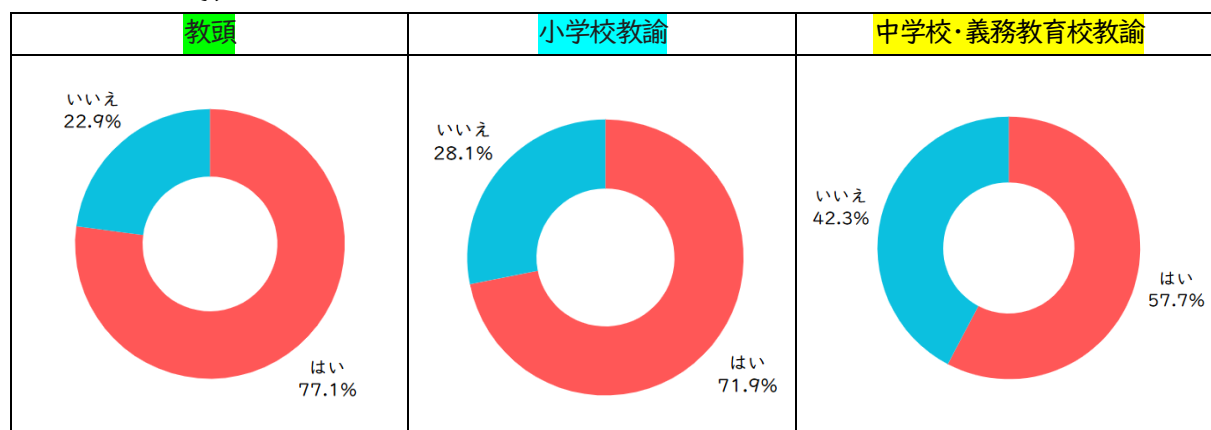
小学校教諭



中学校・義務教育校教諭



質問12 在籍している学校において(自身が担当している授業について)、特別な支援を必要とする児童生徒が、学習内容や進め方等が分かりやすくなるように工夫していることはありますか？(予定表、思考しやすいワークシート等)



質問13 質問12で「工夫している」と答えた方は、どのような工夫をしているか教えてください。

教頭

○見通しがもてるような工夫

- ・時間割や予定表の提示
- ・授業の流れの提示
- ・掲示物、板書を見やすくする(色、大きさ等)
- ・個別にスケジュール表を作成
- ・予定表を保護者と共有して連携した支援

○教材・ワークシートの工夫

- ・個に応じたワークシート
- ・個に応じた課題提供
- ・実態に応じた教材準備
- ・イラストや図等の活用
- ・思考するためのワークシート
- ・振り仮名
- ・ICTの活用
- ・児童生徒が選択して使える教材

○その他

- ・カメラ機能で撮影してノートの代わりにする
- ・個別に丁寧に対応
- ・言葉掛け
- ・活動内容の見直し
- ・教師の関わりや配慮について通級指導教室や特別支援担当、教育相談担当等との密接な連携
- ・校内で教科の指導方法を統一していること
- ・担任なりの工夫に留まっている
- ・支援学級では個別に対応していますが、通常学級ではまだ十分ではありません

学習内容や進め方等を分かりやすくするために、見通しがもてるような支援や教材・ワークシート等の工夫がされている。その中でも、視覚的に理解しやすい工夫が多く挙げられている。また、カメラ機能の活用や、児童生徒が自分で選択できる教材の提示等、実態に応じた工夫や児童生徒が学習しやすい方法を主体的に選択できる工夫等もあった。

一方、校内での指導方法の統一に関しては、「指導方法を統一している」という回答と「担任なりの工夫に留まっている」「通常の学級では十分ではない」という回答があり、学校による取組に差があることが考えられる。

小学校教諭

○ユニバーサルな支援

- ・板書：色使い、文字の大きさ、図や表の活用、キーワードの強調など
 - ・ワークシート：フリガナ、イラスト、図、表、マスの大きさ、難易度調整など
 - ・教材：視覚教材、実物、模型、ICT 機器など
 - ・掲示物：予定表、授業の流れ、ルールの掲示など
 - ・環境整備：教室のレイアウト、照明、掲示物の配置など
- 学習形態：個別指導、ペア、グループ、学級全体を使い分ける
- 障害や特性に合わせた支援
- ・学習遅滞：理解度に合わせて教材や課題を調整
 - ・発達障害：視覚的な情報で理解を促す、集中力を高める
 - ・日本語が母語でない児童：わかりやすい図や絵を用いながら簡単な言葉で伝える
 - ・学習意欲の低い児童：興味を引く教材や活動を取り入れる

個々の教師の実践を合わせると、特別支援教育の視点で見た支援がある程度網羅的に実践されている。すでに行われている実践を、効果を価値づけた上で、職員間、学校間で共有できれば、負担感を感じている現場の教師たちが取り入れやすい工夫として広がっていくとも考えられるかもしれない。

中学校・義務教育校教諭

○視覚的な支援

- ・見通しの工夫：予定の提示
- ・視覚教材の活用：図、写真、イラスト、動画などの視覚教材の活用。
- ・板書・資料の工夫：簡潔に・分かりやすいように板書する、視覚的に捉えやすい資料。
- ・文字の工夫：ルビ、文字の大きさ、フォントの種類、分かち書きなど。
- ・色使いの工夫：重要な部分や区別したい部分で色を使い分ける、赤いチョークを使わない。
- ・ICT の活用：タブレットやプロジェクター、電子黒板。

○聴覚的な支援

- ・説明の工夫：言葉遣いをシンプルに、ゆっくりと丁寧に説明。
- ・指示の明確化：指示を具体的に、簡潔に。
- ・繰り返し：重要なことを繰り返し説明。

○教材・ワークシートの工夫

- ・ワークシートの工夫：図やイラストを多く使用、板書に対応させる。
- ・ワークシートの量と難易度：生徒の理解度に合わせて、ワークシートの量や難易度を調整。
- ・手順の提示：課題の進め方や手順を示す。
- ・難しさへの対応：思考を補助するワークシート。

○授業・指導の工夫

- ・導入の工夫:学習内容の見通しをもてるように、興味関心を惹くように。
- ・個別の支援:机間指導や個別指導でそれぞれのニーズに合った支援。
- ・グループ学習:グループ学習を取り入れ、生徒同士の協働を促す。
- ・評価の工夫:チェックリストの活用。
- ・チームティーチング:複数の教員で指導・支援、引継ぎノートの活用。

○環境整備

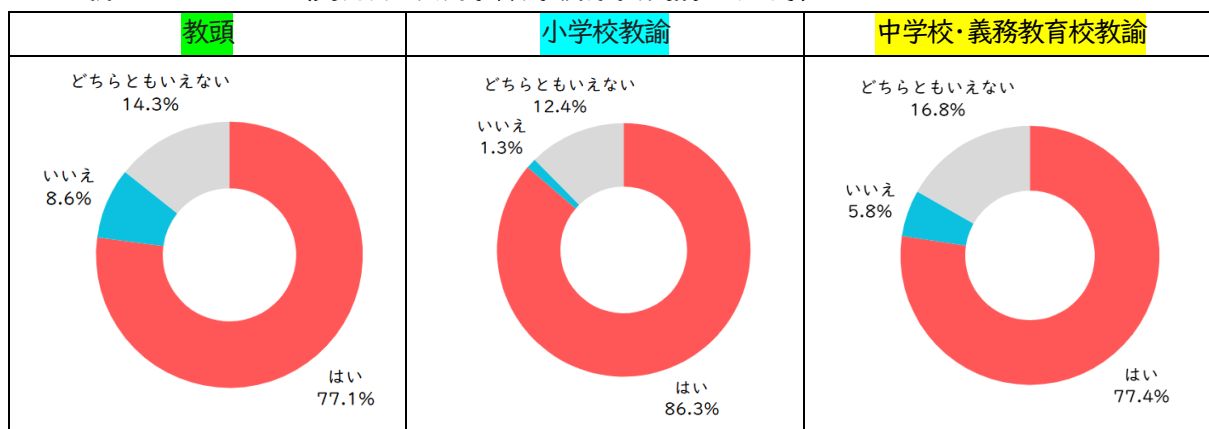
- ・教室環境:机の配置、見やすい掲示。

○合理的配慮

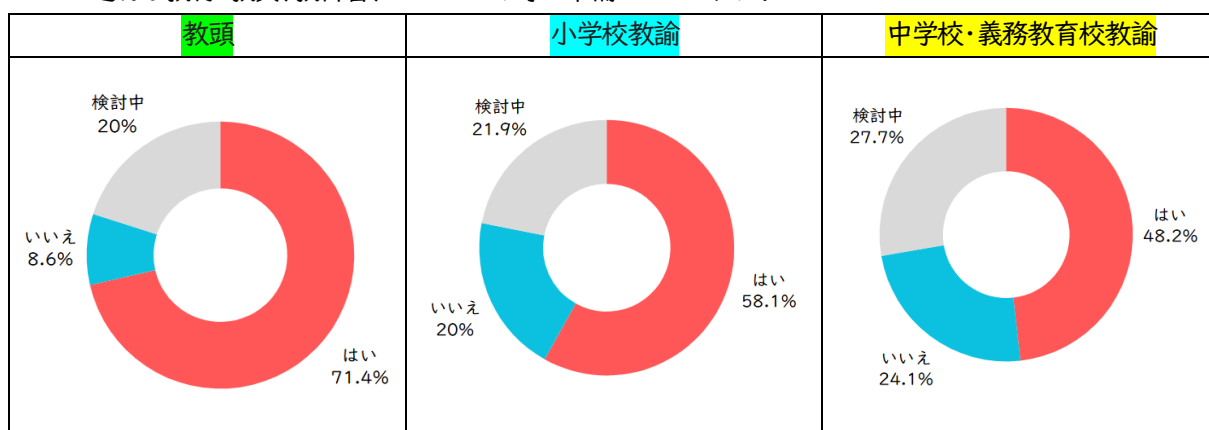
- ・車椅子の生徒の配慮:運動の工夫
- ・外国籍の生徒への配慮:英語訳・ルビ付きのテキスト
- ・見通しのもちづらい生徒への配慮:個別の予定表、カレンダー

小学校に比べ、中学校の教師の方が教科指導への意識が高いのか、具体的な回答が多く、教師の伝え方や評価の方法、教師間の連携など小学校にない回答も見られた。取り組みが具体的であればある程、対象の子供やその特性を具体的に理解しているとも考えられるかもしれない。取り組みがバラエティー豊かになることが、それだけ多様な子どもを包み込む教育に近づくとも言えるかもしれない。

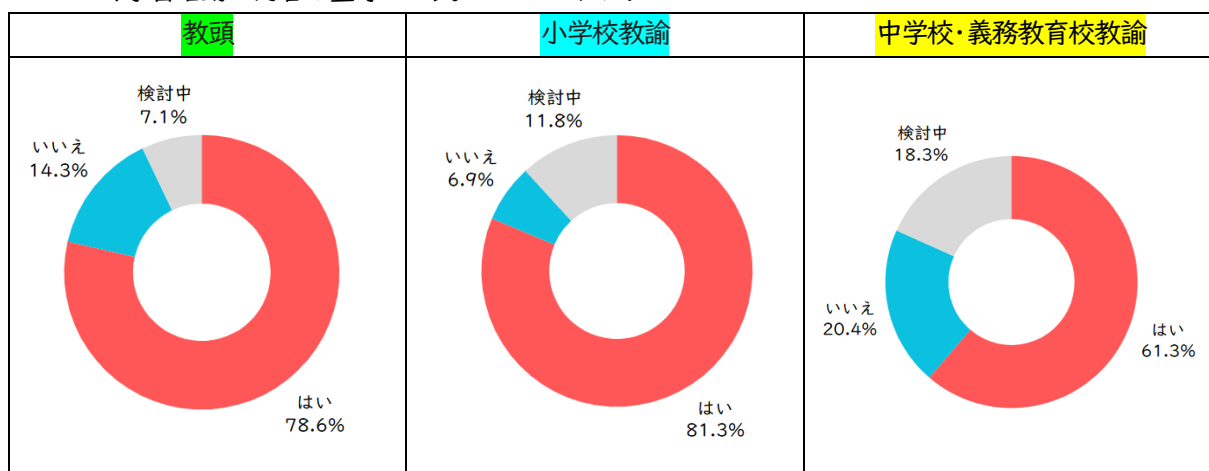
質問14 在籍している学校において(あなたは)、日頃から通常の学級と特別支援学級の担任間で、情報共有や連携をしていますか？(交流及び共同学習、学校行事、支援の方法等)



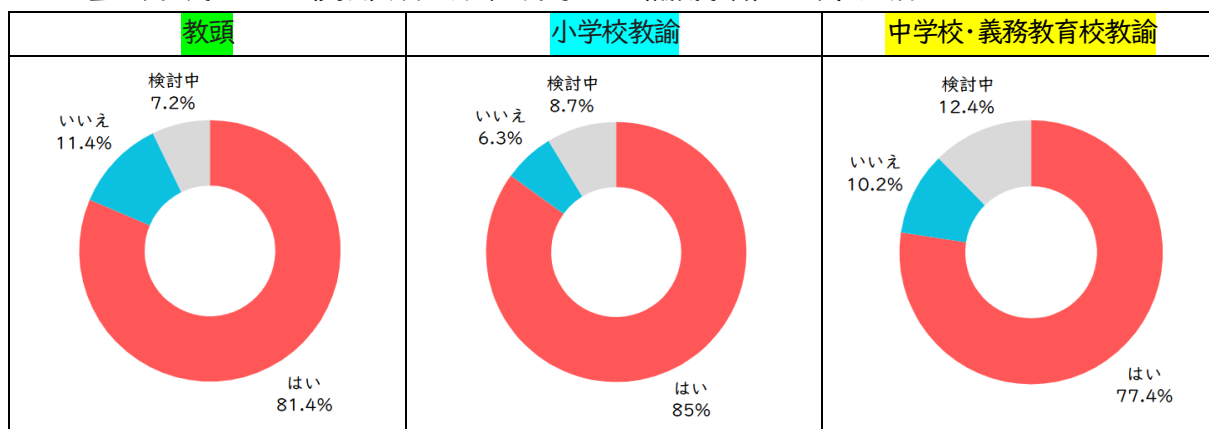
質問16 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒に対して、ICT の活用を含め、適切な教材・教具、教科書、ワークシート等を準備していますか？



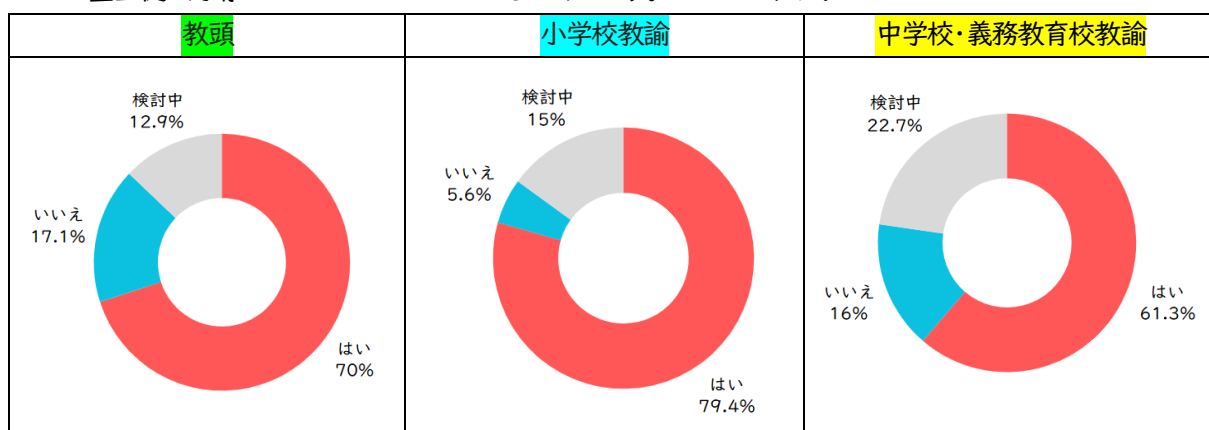
質問17 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒の特性、身体の動き等に応じて、学習活動の内容や量等の工夫をしていますか？



質問18 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒が、学習過程において、他の児童生徒と関わったり(交流)、自ら判断し決定したり(協働学習)する機会を設けていますか？

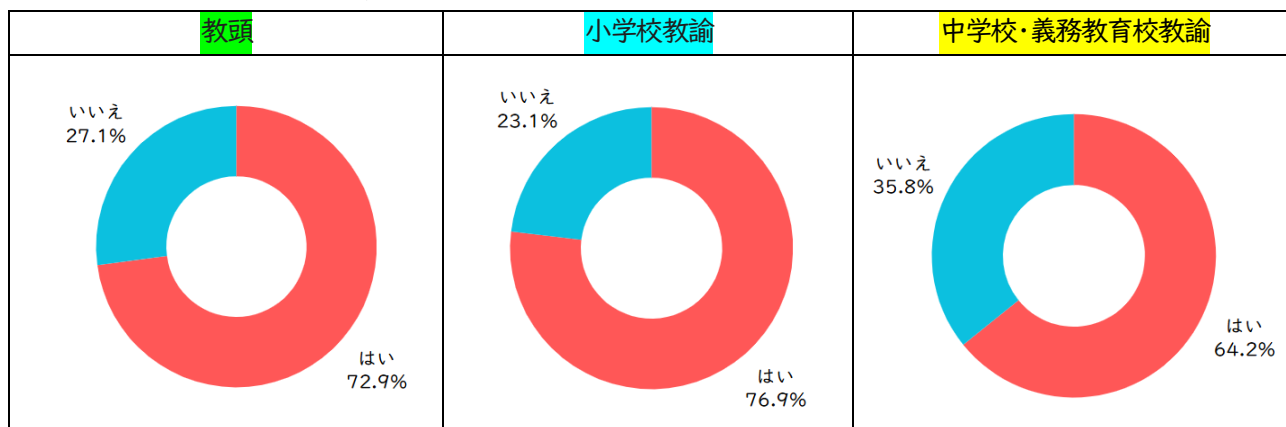


質問19 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒が、学習過程において、他の児童生徒と円滑にコミュニケーションをとるための工夫をしていますか？



学級づくりに関する項目

質問20 在籍している学校において（自身が担当している学級について）、児童生徒が多様性（人それぞれに個性があり、違いがあること等）を認め合うための工夫をしていますか？



質問21 質問20で「工夫している」と答えた方は、どのような工夫をしているか教えてください。

教頭

○学校生活全般

- ・受容する言葉掛けや個人の意見の尊重。
- ・小さなトラブルを、互いを理解する機会として生かしている。
- ・友達のいいところ探しを学校全体で行っている。
- ・個性を認め合う学習や活動を取り入れている。
- ・全教育活動において折に触れ伝えている。

○集会活動、学校行事

- ・児童向けに聴覚障害のある児童の困り感を聾学校の先生に講話していただいた。
- ・人権について学ぶ
- ・異学年交流がさかんで、ほとんどの学校行事で全校児童がかかわるところ
- ・学年を超えた生徒同士の交流機会を毎週設けている。
- ・集団下校時に、こどものよさを紹介し合う場面をつくっている。

○学級経営

- ・在籍学級に関わらず、一人一人の個性や好み、苦手などを理解し合える関係作り
- ・朝の活動で、お互いのよいところを言い合うなどの活動を取り入れている
- ・グループ活動を通してお互いの良さを知る、授業などの場面で担任が意図的にそれぞれの児童の良いところを褒める。
- ・学級でいろいろな友達と関わる機会を意図的に設定し、学級活動の時間を中心に、生活を豊かにする取組をしている。

○学級活動

- ・個を大切にすることを扱う
- ・互いのよいところを伝え合う
- ・構成的エンカウンター

○道徳

- ・道徳や普段の授業において、互いの違いを尊重してそれを認め合うことの大切さを啓蒙している。

小学校教諭

○教師の児童と向き合う姿勢

- ・多様性を認め、受け入れる姿勢を示している。
- ・児童の話に傾聴し、共感する姿勢を示している。

○学習活動における工夫

- ・児童の興味関心に合わせた多様な学習活動を取り入れている。
- ・グループワークやディスカッションを通して、意見交換の機会を設けている。
- ・自分の考えを言葉で伝えたり、発表したりする機会を設けている。
- ・グループ活動で協力して課題解決に取り組む経験を通して、協働・協調する力を育てている。
- ・役割分担をし、それぞれの役割を果たすことで、一つの目標に向かって協力する経験を積ませている。
- ・児童が成功体験を積めるよう、適切な活動を設定している。

○温かい学級の雰囲気づくり

- ・困っている友達を助けたり、困ったときに助けを求めたりする経験を通して、思いやりの心を育てている。
- ・児童の頑張りを認めたり、励ましたりする声かけを行っている。児童が自分自身を肯定的に捉えられるような言葉かけをしている。
- ・相手の立場に立って考え、共感したり、違いを受け入れたりするための機会を設けている。
- ・互いの違いに気づき、それぞれのよさを認め、尊重するための機会を設けている。

個々の教師の実践を合わせると、多様性を認め合う学級づくりのために大切なことがある程度網羅的に実践されている。すでに行われている実践を職員間、学校間で共有できれば、多様性を認め合う『学校づくり』に繋がるとも考えられるか？

中学校・義務教育校教諭

○道徳教育の活用

- ・道徳の授業で多様性について学ぶ
- ・道徳の授業で具体的な事例を用いて多様性について考える
- ・道徳の授業で自分の考えを表現する機会を設ける

○学級活動の工夫

- ・交流活動：グループワーク、ディスカッションなどを通じて、生徒同士が交流する機会を設ける
- ・意見交換：自分の考えを共有し、相手の意見に耳を傾ける機会を設ける
- ・肯定的なフィードバック：生徒の良いところを見つけ、積極的に褒める
- ・規範意識の醸成：相互尊重、思いやり、協力といった規範意識を育む

○教師の働きかけ

- ・モデルとなる行動：教師自身が、生徒に対して尊重の念を持って接し、モデルとなる
- ・個別指導：個別指導を通して、生徒一人ひとりの理解を深める
- ・発言の機会の提供：すべての生徒が発言できる機会を平等に与える
- ・多様性に関する指導：多様性について、具体的に説明し、理解を深める

○環境整備

- ・学級目標の設定：多様性を尊重する学級目標を設定する
- ・教室環境の整備：生徒が安心して過ごせるような、居心地の良い教室環境を作る
- ・学級掲示物：多様性に関する掲示物を掲示する

○その他

- ・匿名での意見交換：匿名で意見交換できるようなツールを活用する
- ・個別面談：生徒一人ひとりと個別面談を行い、悩みや不安を聞き出す
- ・保護者との連携：保護者と連携し、家庭での支援を促す

雰囲気づくりや環境づくりだけでなく、多様性に関わる目標を設定したり、授業や掲示物などで多様性について考える機会や環境をつくったりするなど、子供に直接的にアプローチする取り組みが行われている。対象の子どもの発達段階が高いので、多様性を感覚だけではなく概念としても理解するための取り組みを行っていると考えられる。

質問21 在籍している学校において(自身が担当している学級について)、児童生徒が多様性(人それぞれに個性があり、違いがあること等)を認め合うために課題だということを教えてください。

教頭

○児童生徒に関する内容

- ・児童生徒の認め合う意識の向上:自分事として考える。
- ・多様性の言葉の理解と実際の言動のギャップ:言葉としては理解している、言動が伴わない。
- ・自己理解と他者理解:自己理解ができていない場合、他者理解に繋がらない。
- ・平等と公平の理解:支援が必要な児童に対して、不公平だと感じる児童生徒がいる。
- ・児童生徒の実態差:浸透するまでに時間がかかる児童生徒がいる。
- ・児童生徒の余裕のなさ:学習や学級の状態等、他人を思いやる余裕が生まれない場合がある。

○教職員に関する内容

- ・教職員の意識や理解の向上:自分事として考える。共感的人間関係の構築、傾聴力。児童生徒の特性の理解と支援の仕方、研修や考える機会の創出。職員間の共通理解と同歩調。
- ・教員の指導と支援:発達段階に応じた理解が難しい子どもへの指導。個を大切にすることを子どもに見せる。児童同士の関わり方への支援。
- ・支援にかけられる労力と時間
- ・学級活動の年間指導計画の工夫

○保護者や地域に関する内容

- ・家庭や地域との連携
- ・特別支援教育への理解
- ・子供の特性に関する理解
- ・保護者の考えと実際の学校での生徒の姿の共有を図る場面の充実

○学校間の連携

- ・小・中学校での連携を含め、多様な継続的な支援

○多様性に触れる機会、互いを知る機会

- ・コミュニケーションの時間確保
- ・特別な支援の必要がある子どもや国籍が違う子どもが、どのような時に困ったり悩んだりするのかを実感したり、理解したりする機会
- ・多様な人と関わる機会を持ち、理解を深めること

○小規模校の課題

- ・小規模校であることも要因だが、序列化や先入観を生みやすい。
- ・小規模校で固定された人間関係で、多様性に触れる機会は少ない。

○交流及び共同学習の活用

- ・校区に特支学校があり、毎年4年生が総合的な学習の時間に交流している。その成果の発表の仕方を工夫していきたい。

小学校教諭

<教師や学校、社会の課題>

○教師の指導・支援

- ・児童一人ひとりのニーズに合わせた支援が難しい
- ・保護者との連携が不足している
- ・多様性を認め合う児童生徒を育てるための学級づくり等に関する研修機会が少ない
- ・学校や学級の規模が小さく多様性に触れる機会が少ない
- ・多様性を認め合う学級づくりのための取り組みができていない。
- ・保護者、地域、社会全体の意識が低い

<児童生徒の姿から見える課題>

- 多様性への理解の不足
 - ・障害や特性についての理解の不足、偏見や誤解、特別扱いを嫌う
 - ・多文化共生への意識の低さ
- 共感・協調することの難しさ
 - ・相手の立場に立って考えることが難しい、友達の気持ちを理解できない
 - ・自分のことばかり考えてしまう
 - ・意見の相違を乗り越えられない
- コミュニケーションの難しさ
 - ・言葉でうまく表現できない
 - ・相手の話を聞けない
- 行動を調整する難しさ
 - ・知識としては理解しているが行動が伴わない
 - ・衝動的な行動をとってしまう
 - ・自分の気持ちをコントロールできない
- 自己肯定感が低い

教師によって、できていると感ずることも異なれば、課題と感ずることも異なるということか。しかし、総じて児童生徒の姿に課題を感ずている回答が多いと言える。裏返せば、児童生徒の姿から課題と感ずていることについて、児童生徒に対して指導・支援ができていないと考えることができるであろう。特性に言及している回答も多く、それを認め合うことができる学級を目指すという、教師の発想の転換が必要であろう。また、互いの違いを理解して受容するには児童生徒の実態が幼く、理解してもらうことが難しいという回答や、身につけてしまった固定観念を変えることは難しいといった回答もあった。知識として育むよりも、幼少期から当たり前に多様性を認め合う環境で育つことで体感的に育んでいく必要があるのだろうか。そのためには、まず大人たちが、社会が変わっていく必要がある。

中学校・義務教育校教諭

<生徒の姿から見える課題>

- 多様性に対する理解不足
 - ・個性とわがままの区別がつかない、違いを認められない
- 行動の課題
 - ・衝動的な行動をとる、ルールを守れない
 - ・自分のことしか考えない、自分の考えを押し付ける
- コミュニケーションの課題
 - ・言葉遣いが適切でない自分の考えをうまく伝えられない
 - ・相手の気持ちを考えられない
- 偏見・差別意識
 - ・特定の生徒に対して偏見・差別意識を持っている
- 人間関係の課題
 - ・グループが固定化している、協力し合えない
 - ・仲間はずれ、陰口

<教師や学校、社会の課題>

- 指導の難しさ
 - ・個別指導の難しさ、すべての生徒に合った指導方法を見つけるのが難しい
 - ・差別や偏見を防ぐための指導方法

○評価の難しさ

- ・多様な生徒の成長をどのように評価するか、特別な配慮が必要な生徒の評価基準

○保護者との連携

- ・保護者に多様性についての理解、協力が得られない

○教師の意識

- ・インクルーシブ教育に関する研修不足、学校全体の意識改革

○校内体制、連携

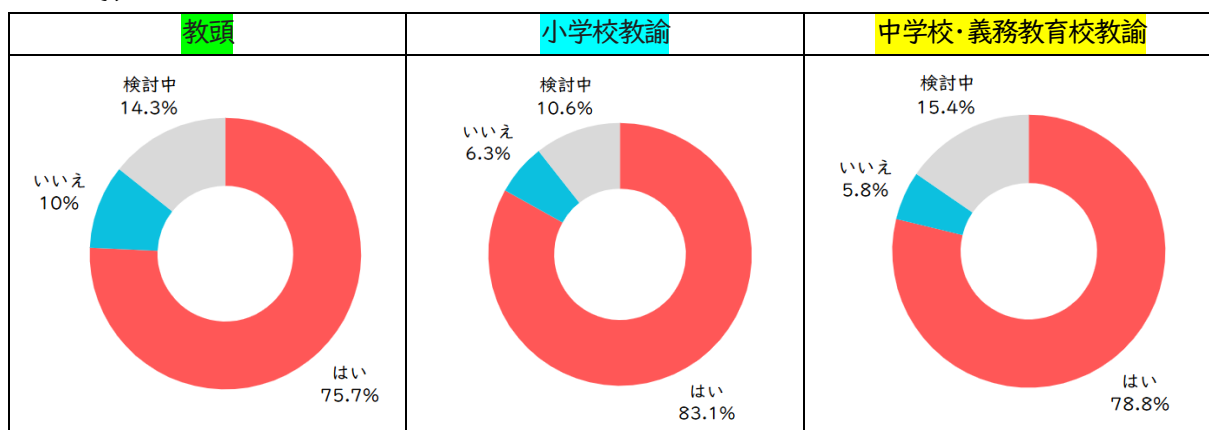
- ・特別支援学級との連携、小規模校における指導体制

○社会的な課題

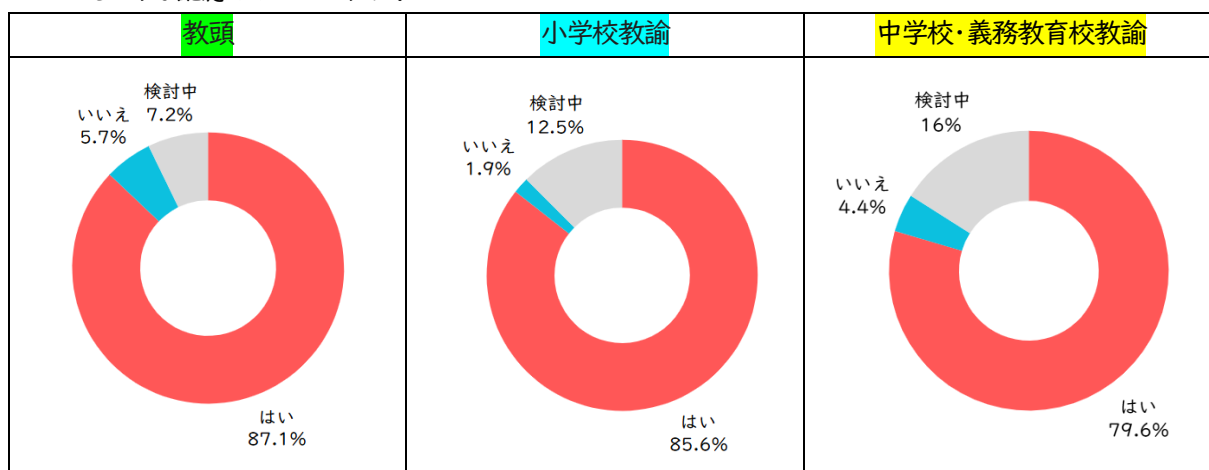
- ・多文化共生社会の実現に向けた課題、差別や偏見の根強い社会

小学校と共通して見られる回答が多くあったが、個別対応の難しさや評価方法の難しさなど小学校にない回答も見られた。発達に伴う子供の実態差の大きさや高校受験との関連などを抱える中学校の難しさを反映しているか。

質問22 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒への関わり方等について、周囲の児童生徒が理解して関われるように理解・啓発を図っていますか？(授業実践、言葉掛け、学級経営等)



質問23 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒が、不安感や孤独感を解消するような配慮をしていますか？



質問24 在籍している学校において(あなたは)、特別な支援を必要とする児童生徒が、自己肯定感を高められるような配慮をしていますか？

